慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾初期入門姓名録について：鐵砲洲、新錢座時代を中心として
Sub Title	Notes on the registration records of the early period of Keio-gijuku
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.334(432)- 387(485)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0334

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾初期入門姓名錄について

――鐵砲洲、新錢座時代を中心として――

河北展生

一　入門姓名錄の創設　二　新錢座への移轉時期
三　新錢座時代入門帳　四　鐵砲洲時代學生數
五　新錢座時代學生數上　六　新錢座時代學生數下

一

慶應義塾は、幕末諸藩の洋學振興風潮に刺戟された中津藩が福澤諭吉を大阪の緒方塾より呼寄せ、安政五年冬、築地鐵砲洲の中屋敷の長屋の一軒に開塾せしめたときにはじまると云はれる。この最初の塾舍は下が六疊二階が一五疊程の二間の家で、(註1)大阪より同行した岡本周吉を塾頭代りに蘭學を教授したのであるが、入門生も少數で、おそらく大部分は中津藩の子弟ではなかつたらうか。萬延元年福澤は第一回渡米で半年更に文久二年には滿一年近く塾を留守にしたが、其間には安政六年入塾した足立寛の如く、緒方塾の如き他の有名塾へ移つた者も存したであらうが、岡本が引續き塾に

居たところからみて、福澤の留守中は岡本が代講して居た、したがつて塾は存續してゐたとみるべきであらう。

そののち文久元年福澤は鐵砲洲を去り、芝新錢座の一小借家に引移つてゐる。この新居移轉は『福澤諭吉傳』の示すごとく、結婚準備のためで、二階共凡そ二〇疊程の家で、一時は小幡彌の叔父野本三太郎が同居してゐたといふから、(註2)中屋敷の長屋とさして變りない手狹なものであつたと思はれる。福澤は同藩士土岐太郎八の次女きんと結婚したが、程なく同年暮より歐州旅行に出向き、翌年暮歸朝したのである。

現存する最古の入門生姓名錄は、福澤が歐州より歸朝した翌年卽ち文久三年春に始るのであるが、それ以前に入塾生が存在する以上、この入門帳以前の入門帳が存在する可能性はあるが、福澤が『慶應義塾紀事』の中で、文久二年迄の記錄は一切なく、すべての記錄は文久三年正月に始ると云つてゐることから、文久三年以前の入門帳は一應無かつたとすべきではなからうか。

福澤のいう記錄とは何を指すかは明らかでないが、此の入門生姓名錄も其一つであらうと思はれる。これは文久三年春入門の小林小太郎に始るが、實際記入されたのは下述の如く元治元年六、七月頃と思はれる。

この姓名錄は薄青紙表紙美濃版袋綴の帳面で、表紙に姓名錄と記され、裏表紙に不可無堂と記されてゐる。第一枚目の表に、前述の小林小太郎の姓名及入塾年月と所屬藩名が記されてゐるが、表紙と第一枚目との間には、かつて猶一枚袋綴に綴られてゐたのが引破られた痕跡が存する。果してこの破棄された紙に何が記載されて居たかは不明である。入門帳には

文　久　三　稔　春　入　門　　松　平　隱　岐　守　內　　小　林　小　太　郎　（一才）

同年初夏入門　中津　和田克太郎（一ウ）
　　同　愼二郎　〃
　　小林克平　〃
同初秋九日入門　肥後藩　林　玄助（二オ）
　　保理井大助　〃
文久三年初秋　仙臺家中　横尾東作（二ウ）
同　年　冬雲藩　北尾尙德（三オ）
　　飯塚靜庵　〃
文久三年十二月廿八日入門　肥後藩　岡田攝藏（號松濤）（三ウ）
元治元年春入門　松平縫殿頭內　土井鎔之助（四オ）
元治元稔春入門　內藤紀伊守內　加藤繁藏（四ウ）
同年三月入門　肥後藩　横井平治太郎（五オ）
　　上野三郎助　〃
　　國友次郎　〃
　　宮川又三（五ウ）
　　北川文之助　〃

同年六月廿一日入門	阿州藩	本田個太郎	〃	
同年六月廿四日入門	越藩	同　爻次郎	〃	
同　稔六月入門	中津藩	村上辰次郎	〃	
		三吉新八郎（號南隅）	（六オ）	
		久保村純介	（六ウ）	
		小幡篤次郎	（七オ）	
		同　仁三郎	〃	
		濱野丑之助	〃	
		三輪光五郎（定四郎）	（七ウ）	
		小幡貞次郎	〃	
		服部淺之助	〃	
元治元年七月十七日入門	肥後	兼友小助	（八オ）	
元治元年七月十八日入門	松平修理大夫内	谷村孫七	（八ウ）	
		谷元兵右衛門	〃	
元治元年九月六日入門	紀州家來	臼杵銀太郎	（九オ）	
元治紀元甲子九月十一日入學	長崎	中村一郎	（九ウ）	

元治元甲子年九月十五日入門　千村平右衞門家來　田中大介（一〇オ）
元　治　甲子　九　月　入　門　下　谷　栗林鐺一郎（一〇ウ）
鬼塚辰之助　〃
陽　其　二　〃

とある。こゝに記した一〇枚表裏三七名の入塾生のうち、七枚裏迄二八名が同一筆跡で記入されたごとく思はれる。姓名錄は後の記入例からみても其都度記入されるのが普通であるのに、年度の異る者迄同一筆跡で記入されてゐることは、この姓名錄が創設されたとき、何等かの記錄が存したか、あるひは在塾してゐたかは別として、とにかく後日一括記入されたものであるやうに考へられる。故に筆跡の相違する元治元年七月十七日以前で、同一筆跡で記入されたなかで日付の新しい六月二十四日以降の間に姓名錄が記入され始められたと考へられる。

元治元年六、七月の間に記入され始めた姓名錄が文久三年春の入門生を記してゐることは、前述したごとく一應これ以前に入門帳の存在しなかつたことを想はせる。しからば何故こゝに至つて入門生姓名錄を創設するに至つたかといふことであるが、姓名錄の書始められた文久三年の前々年暮、福澤は遣歐使節の翻譯方として旅立ち、多大の見聞を得て前年十二月中旬歸國したのである。『西航記』及び『滯歐手帳』によれば、歐州各地の學校を見學し、生徒數教員數學制といつた點に相當注意を拂つてゐる。故にこの旅行を通じて福澤が自己經營の塾に對し何らかの抱負を持つことは予想される。この抱負を福澤は可能な範圍で實施せんと考へたのではあるまいか。その抱負が入門帳の創設、塾舍の移轉、小幡篤次郎等六人の中津藩子弟の招聘、塾風の刷新といふ形であらはれたのではないだらうか。

新錢座から再び鐵砲洲の中津藩中屋敷への移轉について『福澤諭吉傳』は

先生は早くから茲に見るところがあつて多年苦學した蘭學を拋ち英語の研究を始められたのであるが、再度の洋行によつて其研究もます〳〵進み、歐州から歸朝のときには少なからぬ英書を持ち歸り、文久二三年頃からは塾の學生の教授に專ら英語を用ふることにせられた。當時江戸に於ける英學塾は唯一の福澤塾あるのみであつたから、入學者は次第に增して來て、新錢座の一小借家ではとても收容し切れぬのみか、學生の數が增すに從つて塾の設備も自から整へねばならぬ、卽ち第一に先生の住宅と、講堂もしくは寄宿舍とを別にするの必要がある。茲に於てか新錢座を去つて更に鐵砲洲の奧平藩邸內に移ることゝなつたのである。(註3)

と說明し、移轉の時期は六—十月の間と述べて居る。

姓名錄に記された文久年間の入門生は、前述のごとく岡田攝藏まで一〇名を數へるが、岡田は入塾年月よりみて明白に鐵砲洲塾への入門生であるから、小林以下飯塚靜菴迄の九名が新錢座の一小家塾へ入塾の可能性がある。二〇疊內外の手狹な家に新たに九名の入塾生が加はれば、彌々狹隘を感じたことであらうし、それに十月頃には子供が生れることになつてゐるのであつてみれば、移轉の必要が考へられるのは當然であるが、しかし今度移轉した鐵砲洲の中屋敷の塾舍は、五軒續きの長屋一棟を借りてゐる。(註4) 假に文久二年迄の入門生が猶在學して居たとしても、廣きに過ぎる感がある。こゝで福澤は移轉を機に、新抱負による學塾經營を意圖し、大規模な中屋敷の借用を考へたのではなからうか。

同一筆跡で書かれて居る最後の小幡篤次郎等六人の入塾について福澤諭吉傳は、元治元年三月二十三日より六年振りで歸省した福澤が、同鄕の小壯子弟を江戸に伴ひ歸ることを考へ、服部五郎兵衞、竹下郁藏等と相談し、洋學の必要を

力說して、ようやく六名を納得せしめて六月二十六日江戸に伴ひ歸つたもので、その子弟說得に努力した理由を、塾生の氣風が極めて亂雜であつたので、

世間の氣運が英學に向ひ英學修業に志す入學生が殖えて來るに就ては、此亂雜の狀態を改め純然たる學生の修業所とせねばならぬ、併し自身には幕府飜譯局の公務もあり又私の著譯事業もあつて繁忙の身であるから、眞實學問に志し終始事を共にする後進生を得てこれを指導養成し協力一致して塾を經營しよう、それには先づ素性も身分もわかつてゐて且つ志操も確かなる同鄕の後進生を引立て事を共にしようと考へられたのであらう。(註5)

と詳細に述べてゐる。福澤の意圖を示す他の資料は今日みてゐないが、中津における福澤の努力と、この六人中三名迄が後に塾の中心となつてゐる點からみて、やはり福澤諭吉傳に述べてゐるのが正當な推測であるやうに思へる。

塾風刷新の意圖のもとに伴ひ歸れる小幡等六人の入塾と前後して入門生姓名錄が創設されたことは、塾舍の移轉とも關連して、前述の如く福澤の新抱負實踐の一端を示すものではなからうか。この入門帳が文久三年春の入門生から書き始められたのは、後述もする如く、あるひは英學塾として本格的に開始されたときで、福澤の新抱負の現はれとも推測出來るやうに想へる。

福澤が英學を教授し始めた時期については、『慶應義塾七十五年史』に、萬延元年五月米國より歸朝後

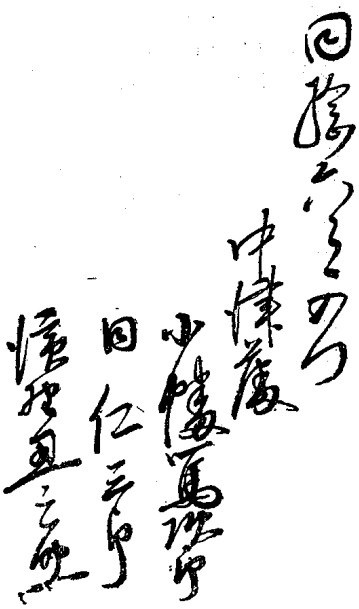
出來るだけ英書を讀むことにして、塾生の教授にも蘭書は教へないで英書のみを教へることにしてゐたが、まだ英書はむづかしくて自由自在に讀めないので、英蘭對譯辭書を便りに、教へるが如く學ぶが如く、學生と共に研究し……安政六年より文久二年頃までは學生に教授するというよりは寧ろ先生自からの研究が主であつた。(註6)

と述べてゐる情況であつたが、歐州より多くの英書を持歸るに及んで、ようやく名實共に專ら英語が教授されたのである。ゆへに歐州旅行は福澤の英語教授の上にも一線を劃したのであるから、こゝに新抱負に基き歸朝後の新入塾生より姓名錄を創める事も考へられるのではあるまいか。

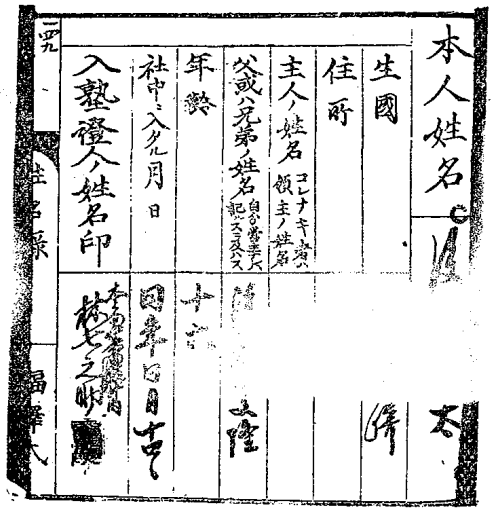
第一圖　鐵砲洲及新錢座入門帳

二

入門生姓名錄の最初のものについては前項に略述したが、この美濃版の入門帳の次の入門帳は半紙版の大きさで、用紙に木版で圖三の如き樣式の整つたものが頁大に印刷され、柱には姓名錄、福澤氏とある用紙と、柱の部分のみが姓名錄、慶應義塾と僅かに相違した用紙が附加され綴られたもので、表紙は青色の緞子表紙で、銀泥模樣の題箋に「姓名錄第一」と記されてゐる。これら二つの姓名錄は名稱が類似して居るので以下兩者を區別するために、推定使用年代によつて最初の姓名錄を「鐵砲洲入門帳」木版印刷の用紙を用ひた「姓名錄第一」とあるものを「新錢座入門帳上」と假稱する。



第二圖　鐵砲洲入門帳內部



第三圖　新錢座入門帳上内部

新錢座入門帳上は第一枚目に

定

一會社に入る者は其式として金壹兩可相納事

一入塾之節は塾僕え金貳朱可遣事

一外宿之社中は毎月金貳朱宛可相納事

一入塾之證人は本人在塾中は一身之事故悉く可引受事

慶應義塾會社

なる規則を載せ、以下小林小太郎より始めて鐵砲洲入門帳を各頁一名宛に寫し直して居る。鐵砲洲入門帳は七〇枚二七一名の入門生を記し、以下六七枚は白紙のまゝ殘されてゐる。鐵砲洲入門帳と、新錢座入門帳上に轉寫された部分とを對比してみるに、大體鐵砲洲入門帳の順に轉寫されてゐるが、左の諸點に若干の相違點がみられる。

鐵砲洲入門帳		新錢座入門帳上	
一　同年初夏入門	和田克太郎　文久三年初夏		和田克太郎
同　慎二郎　文久初秋九日			林　玄助
小幡克平　文久三年初夏			和田慎二郎
林　玄助　文久三年四月			小幡克平
同初秋九日入門			

二

元治元年三月入門　保理井大助　文久三年秋七月九日　保理井大助

同年六月廿一日　村上辰次郎　元治元年三月入門　村上辰次郎

同年六月廿四日入門　三吉新八郎　同年六月入門　小幡篤二郎

同年六月入門　久保村純介　同上　同　仁三郎

小幡篤次郎　同上　濱野丑之助

同　仁三郎　同上　三輪光五郎

濱野丑之助　同上　小幡貞二郎

三輪光五郎　同上　服部淺之輔

小幡貞次郎　元治元年六月二一日　三吉新八郎

服部淺之輔　同年六月廿四日　久保村純介

兼友小助　元治元年秋七月十七日　兼友小助

元治元年七月十七日入門　西山乾　慶應二年十一月入塾　西山乾

三

慶應二年十一月入塾　櫻川正太郎　慶應二年寅三月　八田朋之助

同月入門　堀内仁四郎　同年十一月　櫻川正太郎

鈴木藤益　同　堀内仁四郎

（帖紙）（帖紙下八田朋之助）　土岐謙之助　同　鈴木藤益

同霜月廿八日入塾　廣井智吉　同　土岐謙之助
同年十一月廿八日　廣井智吉
四　同霜月廿八日入塾　小泉信吉　慶應二年十一月廿八日　小泉信吉
同　草郷清四郎
五　慶應四戊辰年孟春七日入塾長岡藩　渡部久馬八　慶應四戊辰孟春七日　長岡　渡部久馬八
同年正月十七日入塾棚倉藩　安川文久郎　慶應四戊辰六月三日信州松本　堀江四方之介
同年正月十二日入塾掛川藩　甲賀秀之進　慶應四年正月十二日遠州掛川太田備中守　甲賀秀之進
同年二月三日入塾關宿藩　吉村岱仲　十六歳堀田寛司郎
同年三月十日入門前橋藩　松野央　——白紙插入——
同年同月十二日同藩　市塚傳次郎　慶應四戊辰年三月十日武藏江戸愛宕下三齋小路　松野央
內田勘右衞門　松平大和守三十三歳
飯田勇太郎　同年同月同日武藏麻布我善坊松平大和守　市塚傳次郎
伊東八十郎　三十一歳
同年四月朔日伊達陸奥守家來　慶應四戊辰年三月十日武藏芝金杉二町目四十歳　內田勘右衞門
以下余白　慶應四戊辰年三月廿三日武藏赤坂大澤町德川龜之助

歩兵頭並格陸軍修行人教授役頭庄藏養子十七歳　飯田勇太郎
同年四月朔日伊達陸奥守　伊東八十郎
慶應四年四月朔日江戸松平能登守早矢仕有的十二歳　早矢仕道三
慶應四年四月二日三河吉田松平刊部大輔二一歳　阿部泰藏

以上五ケ所の相違點のうち、四迄は順序を誤つたり帖紙の下に記された者が筆寫されてゐるのであるが、五はいさゝか問題が存するように思はれる。まづ何故に白紙が插入されてゐるのか、無意味に白紙を插入したとは考へられない。したがつて白紙插入の意味とその時期及び二名が轉寫されてゐないことなどの諸點について鐵砲洲、新錢座上兩入門帳を對比しつゝ考察してみる必要がある。

新錢座入門帳上は總計二九八枚が袋綴になつてゐるが、最初の一枚は前述した規約が記されて居り、一四三枚目に問題の白紙が插入されてゐる。二枚目より白紙を含めて二〇四枚目迄は柱に福澤氏とある用紙であるが、二〇五枚目以下九四枚は慶應義塾の柱ある用紙である。綴穴の情況からみて慶應義塾の柱ある用紙が追加して綴直されたものであることは明らかである。ところで問題の白紙がこの福澤氏の柱ある部分のみ綴られてゐた時に既に插入されて居たか、或は最初は無くて後に插入されたが、其時は慶應義塾の柱ある用紙がまだ綴られなかつたのか、更には慶應義塾の柱ある部

分が追加された時に插入されたとすべきかなど三つの場合が考へられる。しかし白紙に綴直しの餘分の穴が、前後の用紙と同樣に存する點からみて、最初から綴込まれてゐたやうに考へられる。

しからば何故に一四三枚目に白紙を插入する必要があるのかと云ふ疑念が生ずるが、これは白紙が鐵砲洲より新錢座への移轉の境界を示すためのものであるやうに考へられる。卽ち鐵砲洲入門帳が樣式の整はぬ書式で書かれて來たが、新錢座への移轉を機會に書式を整へやうとして、新錢座入門帳上の前半部にみられるごとき樣式が定まつたので、鐵砲洲入門帳の記載者を新樣式の姓名錄に寫し直すことが行はれた。したがつて書式は整つてゐるが實際には第二冊目に當る新錢座入門帳上に「姓名錄第一」なる題箋が貼布されたのではあるまいか。鐵砲洲入門帳を轉寫する際に問題になるのは、新入門帳に記載すべき入塾者があつた時、何等かのしるしがなければ、轉寫が終る迄記入を待たせる必要が生ずる事である。この不便をなくするために鐵砲洲入門帳記入者の數を豫め別にして置くためにその境界に白紙を插入して綴ることは十分考へられる。この豫測を裏付けるものとしては、鐵砲洲入門帳記入者數を數へた形跡があることである。卽ち小林に始る記入者の一〇番目岡田攝藏の名の下に少さく一、以下一〇人目毎に二、三、四と順次記入し、二六〇番目の慶應三年十二月三日入塾の梶川虎馬まで見ることが出來るが、二七〇番目の內田勘右衞門の下には七の字が記入されてゐない。これは內田が白紙の後に記入されてゐる點も考へ併せて、彼が旣に新錢座への入塾者で、新錢座入門帳上が印刷製本出來る以前に入塾したので、取敢へず鐵砲洲入門帳に記入させたのであつて、鐵砲洲入門帳記名者數を數へたときには未だ入塾してゐなかつたか、あるひは意識的に數へる必要がない爲に數へられなかつたためではなからうか。

白紙は慶應四年一月十二日入塾の甲賀秀之進と慶應四年三月十日入塾の松野央との間に插入されてゐるが、この期間に白紙を插入して區別をつける程の問題としては一應鐵砲洲より新錢座への塾舍の移轉が考へられる。塾舍の移轉について『福澤諭吉傳』は

塾生はおひおひ多人數となつて鐵砲洲の塾舍は狹隘を告げた上に、外國人居留地の豫定地になつてゐた築地海岸の土地はいよ〳〵此年の春より立退を命ぜられることゝなり、鐵砲州の奥平邸も其中に在つたので、塾はいづれにか移轉せねばならぬことになつた。先生は豫てより其移轉地を探してゐられたところ、其前年の冬、芝新錢座に在る有馬家の中屋敷四百坪の地面が賣物に出たといふことを聞かれ、……三百五十五兩の代價で其十二月二十五日に受渡を濟ました。……扨買入れられた新錢座の有馬屋敷には古い長屋が一棟と土藏が一つあるのみで空地同樣であつたから、塾舍はいふに及ばず先生自身の住宅も建築することになつた。住宅の方は鐵砲洲の邸に在つた彼のお釣殿と先生が自分で建て足した二階造りの書齋とを移して隅の方に建て、塾舍の方は奥平の長屋其他の古家を持つて來て約百五十坪、百人の寄宿生を容れるといふ計畫で、全部落成して移轉したのが四月のことであつた。併し住宅の方は早く出來し、先生は二月中旬頃から五六人の塾生と共に移轉して、塾舍の工事を監督してゐられた。(註7)

と述べてゐる。

慶應三年十二月十六日附福澤英之助宛福澤書翰に、塾舍の移轉に關して

先便申入候通り鐵砲洲外國人居留地も彌來年三月九日御開相成候に付ては宅も塾生は多人數且又色々不安心の筋も有之候間近日外宅の積既に新錢座邊に相當の屋敷有之早春引越候積に御座候(註8)

とのべてゐるところから、福澤は慶應三年十二月中旬には、三月九日以前に新錢座に移る予定でゐたと推察される。

また慶應四年四月十日附の山口良藏宛福澤書翰に

小生義は當春より新錢座に屋敷を調小學校を開き日夜生徒と共に勉强致居候(註9)

と述べてゐる。更に「慶應義塾新議」の冒頭にも

去年の春我慶應義塾を開きしに有志の輩四方より集り云々

と記してゐる。この時代はなほ太陰曆使用の時代であるから、慣用的に春は三月迄を意味する。山口宛の書翰は五月の誤りであらうと註記されてゐるが、五月の書翰であれば、四月に新錢座の塾舍が出來たときには、先月とか去月とか云ふべきで、四月を今春とすることにはいさゝか無理がある樣にも考へられる點から、三月以前に移轉したとの可能性が生じて來るのである。

今假に白紙を移轉の時を示すものとするとき不都合なのは、慶應四年六月三日入塾の堀江四方介が白紙前に記入されてゐることであるが、しかしこれは、白紙の後七枚目の裏卽ち慶應四年五月四日入塾の細井雄四良と同年六月五日入塾の名島藏太の間に再び記されており、しかも朱筆で消して欄外に再出と記してある。この朱筆は後日何等かの必要で所々に出身國名、改姓名等を加筆してあるものであるから、堀江を消したのもそれらと同じであると考へられる。この朱筆加筆の時はおそらく現存する「入社人名見出張」を作成するときではなかつたかと思はれるが、その際堀江が白紙前に旣に記されてゐたので後出のものを消したのであらう。堀江が再出した理由は不明であるが、想像を逞しうすれば、堀江は最初この消された部分に記入すべきであつたのを誤つて白紙前に記入したため、再び白紙後に記入して、白紙前

の部分を消さなかつたのではあるまいか。

鐵砲洲入門帳記入者の全部が白紙前に轉寫されず、松野央以下、市塚、內田、飯田、伊東の五名が白紙の後に記入されてゐること、伊東と同日入塾の早矢仕道三が鐵砲洲入門帳に記入されてゐないこと及び、堀內を別にして、文久三年初春入塾の小林以下渡邊久馬八までが同一筆跡で轉寫されたのち、異筆で堀江が誤つて記入した部分をあけて甲賀秀之進のみが白紙以前に書かれ、甲賀をはさんで記入されるべき安川文久郎と吉村岱仲の兩名が轉寫されてゐないことなどの問題があるが、これらは一應次の如く解釋し得るやうにおもはれる。

鐵砲洲入門帳は、入社年月日、所屬藩名、本人氏名を記載するのみである。ところが新錢座入門帳上の渡邊久馬八までの同一筆跡で轉寫された部分は、本人氏名、生國、主人又は領主の姓名、入社年月日が記入されてゐるのみである。主人又は領主の姓名の部分は無記入の者も相當數ある。主人又は領主の姓名は必要とあれば所屬藩名より記入し得るところである。しかるに筆跡の異る甲賀秀之進及白紙以下の松野、市塚、內田、飯田のごときは、記載內容が著しく詳細になり、鐵砲洲入門帳を臺本としては到底記入し得ない年令とか保證人あるひは父兄氏名が記載されてゐるのである。このことは新錢座入門帳上が使用され始めたときには、甲賀、松野、市塚、內田、飯田等が在塾してゐたことを推測せしめるものである。しかも甲賀、松野等は云はゞ新錢座入門帳に最初に記入する入塾生である。したがつて甲賀が白紙前に、松野が白紙直後に記載したといふことは、彼等が白紙の存在を充分意識してゐたと推察することが出來るのである。

こゝで問題になるのは安川、吉村の兩名が新錢座入門帳上に記入されてゐないことである。このことについては積極

的にその理由を證明し得る資料はないのであるが、安川は柵倉藩、吉村は關宿藩の出身で、共に譜代藩の家臣であり、またこのころの入塾生の中には、落着いて塾に居らず、入門とは名ばかりで、一種の宿舍代用に利用した者もあつたとのことであるから、あるひはこの兩名は愈々新錢座入門帳上が出來て記入するときには塾に居らず、しかも入塾とは名ばかりで、未だ期間も短いことゆえ記入しなかつたとも考へられないことはない。また甲賀が渡邊久馬八の直後に書かず、安川の記入する餘地を殘して記入して居る點を考へれば、安川等が新錢座入門帳記載開始當時在塾して居なかつたことはほゞ確實であらう。

以上は白紙插入を移轉の境界として考察してみたのであるが、このころの重大問題として、慶應義塾の命名といふ事柄がある。塾名の命名についても、日時を示す明確な資料は無いが、移轉と同時に、卽ち白紙插入を境として塾名が附けられたとするならば、新錢座入門帳上に用ひられる柱は福澤氏とせずに慶應義塾とすべきではないかと考へられる。また時間的に移轉と同時に慶應義塾の命名をしたと考へることには多少の困難が存するやうに考へられる點より、やはり白紙は一應塾舍の移轉を示すものとして考へたい。尤も塾舍移轉後心機一轉したところで塾名の命名といふことも考へられるが、この問題については簡單に後述するがもう少し資料を得たとき再考察してみたい。以上考察した諸點が是認されるならば、この白紙は塾舍の移轉を示すもので、その時期は甲賀秀之進の入塾した一月十二日以後三月十日以前に行はれたとみるべきではなからうか。然もこの新錢座入門帳上が使用されはじめられた日は、慶應四年四月朔日ではなかつたかと考へられるのである。

三

新錢座時代の入門生姓名錄は新錢座入門帳上と、濃茶色緞子表紙で銀泥模樣の題箋に「入社姓名錄第二」と記した新錢座入門帳下の二冊である。新錢座入門帳上に於ける鐵砲洲入門帳の轉寫部分に關しては前項に於て考察した。次に考察すべき問題は、木版印刷用紙の柱が福澤氏とある部分の後に、慶應義塾と云ふ柱を印刷した部分が追加整本されてゐることについてである。

慶應義塾の柱ある用紙は、前述したごとく二〇五枚目以下で、明治二年二月廿二日入塾の佐竹勇之亟に始るのであるが、用紙はやゝ異るが、木版樣式及筆癖からみて、柱の福澤氏の部分に埋木して、慶應義塾と彫り直した版木を使用したのではないかと思はれる。したがつそての印刷にはさして時間がかゝらなかつたとみなければならない。

慶應義塾と命名された時期については、今日知り得る最も古いものはやはり慶應義塾入社規則に記された慶應四年四月の日付である。しかし慶應義塾新議には昨年春と記されて居ることから、あるひは四月以前に命名されてゐたといふことも考へられ、前にも觸れたごとく、移轉とほゞ同時ではないかとも考へられるが、明確なことは不明である。福澤氏なる柱の用紙に「社中ニ入タル月日」と云ふ欄があり、移轉と同時に一種の財團法人組織とする意圖の存したことは推測し得るが、社中なる語を以て直に慶應義塾社中と解することは出來ず、むしろ、柱に福澤氏として居る點から、一應塾の命名は移轉とやゝおくれると考へるべきであるやうに思はれる。此の間の問題は資料不足で斷定は出來ないが、慶應義塾なる名は慶應四年四月には既に決定されて居たのである。しかるに慶應義塾なる名ある柱の用紙が入門帳に使

用されたのは、一〇ケ月を經過した明治二年二月二十二日以降である。前述したごとく版木は假に新刻したとしても一枚であるから何程も時間を要しないとは思はれるのに、埋木したごとくみうけられる。してみればこの柱の變化を如何に解すべきであらうか。

これについては、福澤氏の柱ある用紙が終り、新らたに用紙を印刷する必要が生じて來たので、この機會に福澤氏とあるを慶應義塾と改めて印行し、これを入門帳の後に追加したもので、この變化には別段の意味がないとする考へと、猶福澤氏の名を印刷せる用紙が存し乍ら、何か特に意味があつて急に慶應義塾なる名稱の入つた柱ある用紙にあらため、餘白の部分を取去つて、新用紙を綴つたもので、この變化には何等か特別の意義があるとする考へとの二樣が考へられる。

福澤氏と柱にある用紙の最後の一枚の表裏はともに二月六日の入塾生で、その前は二月二十日の入塾生が記されて日付順番が狂つてゐるが、他にも日付順の相違する場所に記入された例が數ケ所存するから、慶應義塾と柱にある用紙追加の際に亂れたとすることは危險である。むしろ福澤氏と柱にある用紙の最後の一枚の表裏の記名人と、慶應義塾と柱にある用紙の最初の記名人は共に大垣藩戸田釆女正を領主とする人達であり、しかもこの三名が筆跡墨色が同一と思はれるから、福澤氏と柱にある用紙になほ餘白があるときに、既に慶應義塾と柱にある用紙が追加されたのではないかと思はれるのである。勿論この推察が許されても前記の新舊用紙の變化に對する二樣の考へかたに對する積極的な判定資料とはいへないのであるが、この新舊用紙の變化にはさしたる意味がないとする考へ方の可能性を幾分增大せしめるのではないかと思はれる。

新錢座入門帳上は、二六五枚目の裏、明治二年八月十二日入社の三嶋德藏で終り、そののちに三四枚の無記入用紙があるまゝ、明治二年八月十四日入社の野田高之助に始る新錢座入門帳下に移つて居る。新錢座入門帳上がなほ餘白を殘し乍ら新錢座入門帳下に移行した理由は、當時の慶應義塾にとつて重大問題である塾則の變更等の存したためではなかつたかと推察されるのである。

明治二年八月は汐留の奥平邸内の長屋を借用して汐留出張所が開設されたのみならず、この月には「芝新錢座慶應義塾之記」が相當内容が改められ「慶應義塾之記」として印刷されてゐる。汐留出張所の開設を知らせるために作つたと云はれる「慶應義塾新議」によると、出張所設立の趣旨を述べた後

一、入社の式は金三兩を拂ふべし。

一、受教の費は毎月金二分づつ拂ふべし。

一、盆と暮と金千匹づつ納む可し

但し金を納むるに水引、熨斗を用ゆべからず。

一、此度出張の講堂は講書教授の場所のみにて、眠食の部屋なし。遠國より來る人は近所へ旅宿す可し。隨分手輕に滯留すべき宿もあるべし。

一、社中に入らんとする者は、芝新錢座慶應義塾へ來り、當番の塾長に謀るべし。

とある。この入社規則は新錢座入門帳下に

定

一會社ニ入る者ハ其式として金三兩可相納事
一受教の費は毎月金二分ツヽ可相納事
一盆と暮と金千疋ツヽ可相納事
　但し金を納るに水引のしを不及用
一入塾之節は塾僕へ金貳朱可遣事
一入塾之證人ハ本人在塾中其一身之事故悉く可引受事

慶應義塾同社

とあり、語句に於て多少の相違點がみられるが、その趣旨は同一である。

明治二年八月印刷の「慶應義塾之記」には入社規則が印刷されてゐないが、「芝新錢座慶應義塾之記」には

○入社規則
一會社ニ入ル者ハ其式トシテ金壹兩可相納事
一入塾之節ハ塾僕へ金貳朱可遣事
一外宿之社中ハ毎月金貳朱宛可相納事
一入塾之證人ハ本人在塾中其一身之事故悉ク可引受事
　慶應四年戊辰四月

慶應義塾同社

と新錢座入門帳上に記された入社規則と同文の入社規則が印刷されてゐる。「芝新錢座慶應義塾之記」と「慶應義塾之記」の主な相違點は、日課の變更、塾建物配置圖の相違の外「慶應義塾之記」には、入社規則がなくなつてゐるが、新たに童子局の日課、汐留出張所の日課が附加されてゐることである。

「芝新錢座慶應義塾之記」に記された入社規則は、前述した新錢座入門帳上の最初に記された入社規則とほとんど同文で、たゞ新錢座入門帳上の規則の最後が「慶應義塾會社」となつてゐるのに、「芝新錢慶應義塾之記」所收の慶應四年四月附の入社規則、「中元祝酒之記」、「慶應義塾新議」、及び新錢座入門帳下の入社規則にはいづれも「慶應義塾同社」と記されてゐて新錢座入門帳上記載の入社規則と相違してゐる。「芝新錢座慶應義塾之記」はおそらく慶應義塾の諸規則類を印行した最初のものと思はれるのであるが、此書の目的は慶應義塾の内容を示し廣く入塾生を募らむ爲のものと思はれるのである。その印刷發行の日附は明らかでないが、明治元年九月十一日の山口寛齊宛福澤書翰に

別冊は弊塾の記に御座候此度上木仕候に付差上候有志の人え御投與被下度實は今日製本少し斗出來候義に付部數少く尙又出來次第御廻し可申上候云々

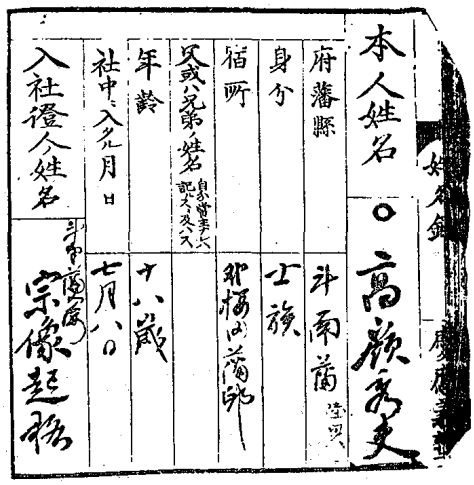
とある弊塾の記はおそらく前記「芝新錢座慶應義塾之記」をさすものと思はれる。したがつて「芝新錢座慶應義塾之記」は八、九月頃に記され上木されたものと思はれる。この「芝新座慶應義塾之記」の附圖の南奥に波線で示した未成校舍がある。新錢座の塾舍は百人の寄宿生を容れるものとして建てられたのであるが。移轉は遲くとも四月には行はれたのであり、七月まで工事が延引したとは思はれず、從つて此の未成部分は新錢座へ移轉後新たに予定されたものではなからうか、然りとせば新錢座に於て明治二年八月以前に校舍の建築をなしたのは洋兵明鑑の收入に依る增築がある。

從がつてこの增築部分は後述の如く洋兵明鑑の肥後藩への賣上收入に依つて建てられたと思はれる明治二年一、二月より前ではないかと思はれるのである。

前述の慶應義塾會社と同社の問題は或は新錢座入門帳上に記載の入社規則が慶應四年四月附の入社規則――「芝新錢座慶應義塾之記」所收――以前に記されたもので、その時は「慶應義塾會社」なる名稱が考へられてゐたのが、中元祝酒之記が記され更に八九月頃記載の「芝新錢座慶應義塾之記」の記載される頃より「慶應義塾同社」なる名稱に改められるに至つたのではないかとも推測されるが、何分にも資料不足で斷定は出來ない。

さて新錢座入門帳下に記された入社規則が、明治二年八月出版された「慶應義塾新議」なる汐留出張所の設立趣意說明書にほゞ同意の規則となつて記されてゐるが、果してこの入社規則が、明治二年八月に改定されたか否かはなほ疑問を抱かしむ餘地が存するのである。また「芝新錢座慶應義塾之記」は慶應義塾之記として最初のものであらうとはほゝ推察されるが、明治二年八月までの間になほ他に慶應義塾之記が印行されてゐなかつたとは斷定出來ないのである。しかし極めて消極的ではあるが、今日まで「芝新錢座慶應義塾之記」と明治二年八月印行のもの以外、この間の年代に印行された「慶應義塾之記」をみてゐない點、新錢座入門帳上に餘白部分が殘されてゐること、汐留出張所への入門生も本塾で入塾手續をとつたと思はれる點、及び、新錢座入門帳に塾則の重大な變更を思はせるものが前述した點以外に考へられない點などより、新錢座入門帳下に入門帳があらためられたのは、授業科の變更卽ち、新錢座入門帳上及び慶應義塾新議に記された入社規則に改められたものによるのではないかと考へられるのである。今この推測が許されるならば、新錢座入門帳下は新塾則によつて、八月一四日入塾の野田高之助より使用されはじめたことになる。

新錢座入門帳下は明治二年八月一四日入塾の野田高之助以下二五〇枚目表の明治四年四月八日入社の村山眞壽美迄記入され、以下三〇〇枚目迄餘白となつて次の入門帳に引續いてゐる。この入門帳は薄茶絹張表紙で、奉書紙の題箋に「入社姓名錄……」とあり、下部はすれて判然としないが、明四月と思はれる字が横書されその下は、なほ墨色は認められるも全く判讀出來ない、この入門帳の用紙は新錢座入門帳上下とは様式の異る圖四の如き用紙が綴られてゐる。この入門帳は明治四年四月一二日入塾の豊田敬一に始まつてゐる。これは前述の例にならつて「三田入門帳一」と假稱する。



第四圖　三田入門帳（一）内部

新錢座入門帳下になほ餘白がありながら「三田入門帳一」を使用するに至つた理由について先づ豫想されるのは三田への移轉であるが、福澤諭吉傳は、慶應三年十一月三田の土地を借用し、四年春早々小幡甚三郎が專ら移轉事務を司つて準備し、三月に移轉を完了したと述べてゐるのみならず、『慶應義塾五十年史』は義塾が新錢座より悉皆三田丘上へ移り了りしは、明治四年三月十六日なりしが、是より先き小幡甚三郎氏は、一月頃より既に同所に引越し、修繕又は新築工事を監督しつゝありしが、名古耶六都氏亦其補助として、同年二月二十一日を以て三田に移れり。(註10)

と明確に月日を記してゐる。この日が何に依つたか出典は明示されてゐないが、無下に否定し去ることは許されない。したがつて四月八日と十二日の間に三田移轉を考へることは困難と考へられる。更に新錢座の塾を買受けた攻玉社が四月十六日新錢座に移轉してゐることを考へれば、(註11)更に三月移轉の可能性を強くするごとく考へられる。

三田移轉が三月であるとすれば、次に考へられる理由は「慶應義塾社中之約束」の作成施行といふことである。この社中之約束は

東京三田二丁目慶應義塾は、慶應年中、芝新錢座に設けし塾を移したるものなり。其地面は福澤諭吉の名を以て官に借りしと雖も、私塾を開き、生徒を教ふるが爲めにとて、官より貸渡し、其建物は、塾の有金、並に塾の名を以て借りたる金を出して買受けしものなれば、福澤氏の私有にあらず、社中公同の有して、法を立て、法を行はれしむる者、其地位に居て其事を執るの間、之を管轄するなり。

とあり、三田の地面は明治五年五月に正式に買受けてゐるから、この社中の約束はそれ以前のものとみることが出來る。この社中の約束は慶應義塾之記と同じく、塾の諸規則課業表を掲げてゐるが、その內容は著しく精密になつてゐる。特に入社規則は

第一條　入社の定日は、其時に從ひ、塾監局より報告す可し。

第二條　地方官の印章なき者は入社を許さず、印章を押す時は、系紙並に案文は、入社申込の時、塾監局より之を渡す。

第三條　入社金三兩、入社の時、會計局へ納む可きなり。

第四條　入社の後は、毎月受教の月金として、一兩二分づゝ、前月の末、會計局へ納む可きなり。但し教授方にても、會讀講義に出席して教を受くる者は、月金を納むること生徒に異ならず。

とあり、入社金月謝共に變化してゐる。この社中之約束が何時定められたかは明らかではないが、三月に移轉を完了

し、塾も相當移轉のために資金を費したことゝ思はれる點なども併せ考へるとき、或は四月頃に社中之約束を作り、これを四月十二日入塾の豐田敬一より適用したゝめ、こゝに從來の入門帳を改めて三田入門帳一に新たに入塾生姓名等を記載せしめるに至つたのではないかと考へられるのである。

四

三田以前の入塾生については、文久三年春以來の入門帳三冊により知り得るのであるが、入塾生の在塾期間とか在塾生數等についてはこれを明らかにする資料は極めて稀で、しかもその大部分がその一端を示すか、かなり時間的に後に記載されたものである關係から、塾の情況を考察するのに困難である。以下これら不充分なる資料を入塾情況と對比せしめつゝ塾の情況を推測してみやう。

文久三年以前のことについては

抑も本塾の起立は今を去ること二十二年安政五年午十一月舊中津の藩福澤諭吉なる者大阪より東下して江戸鐵砲洲の中津藩邸に於て數名の學生を教へたものに係る。(註12)

安政五年より文久二年の終に至る四ケ年餘の間は生徒の就學する者絶えず新陳代謝して僅に數十名にすぎず。(註13)

先生の歸朝後學生(註14)の數は次第に增して來たが、英學塾としては尙ほ甚だ微々たるものであつた。(註15)

とあるのみで、僅かに開塾當初は數名であつた學生が、數十名に增加したと云ふことが推知出來るのみである。在塾者として大阪より同伴した岡本周吉と、足立寛が入塾して最大限福澤が歐州旅行に出向いた文久二年四月頃まで在塾した

ことを推知し得るのみで他は全く不明であるが、特別藩内に洋學氣運が昂揚した爲に福澤が呼寄せられたとも考へられない所より、入塾生もさして多くはなかつたものと推測される樣に思はれるのである。

文久二年秋福澤は新錢座の一小借家より鐵砲洲の中津藩中屋敷に移轉したのであるが、この後期鐵砲洲時代初頭の學生數に關しては、元治元年、數年振りで鄕里に歸つた福澤が、同鄕の子弟六名を伴ひ歸京した頃の塾生の情況を『福澤諭吉傳』は左の如く述べてゐる。

小幡等が中津から來た當時塾に居た者は、前に記した小幡彌と和田克太郎、同愼次郎（後に福澤英之助と改む）の三人が前に來てゐて、中津人が前後合せて九人、熊本人が岡田を始め林玄助其他十餘人居た。熊本人が比較的多かつたのは、同藩の留守居役國友某といふ勢力家が先生の許に出入してゐたから、多分此人の勸誘に依つたものであらうといはれてゐる。それから伊豫松山の小林小太郎、仙臺の横尾東作、雲州松江の北尾高德、飯塚納等、他藩人が四五人、合せて約二三十人ぐらゐであつた。(註16)

『福澤諭吉傳』の記載は何時の情況であるかを明らかにしてゐないが、文意より見て、小幡等六名の中津藩子弟の入塾した元治元年六月頃を述べてゐるものと考へられる。入門帳に記載された人員は、この中津藩子弟六名の入塾生を加えて二八名に達し、その内譯は、中津藩九名、熊本藩一一名、松江藩二名、松山藩、仙臺藩、田野口藩、延岡藩、德島藩、福井藩各一名となつてゐて『福澤諭吉傳』の記載と大體一致する。しかし『福澤諭吉傳』はおそらく入門帳に依つて記載してゐるものとおもはれるのであるが、如何なる根據に依り、これら二八名の入塾者がほとんど全部在塾してゐたと斷じたかは明らかでない。『福澤諭吉傳』に記された數字は常識的に推算される數字ではあるが、緒方洪庵傳所收

附錄の緒方塾姓名錄の文久四年二月六日入門生として、小幡彌の名が記載されて居る。小幡彌は文久三年初夏に福澤塾に入塾して居り、小幡篤次郎等六名の入塾したのは元治元年（文久四年）六月であり、小幡彌は其後大坂にて醫者をしてゐるからそのまゝ大坂に住みついたと思はれる點があり、前記『福澤諭吉傳』の記載と矛盾する如く考へられるのであり、『福澤諭吉傳』の記載には、なほ疑問を挾む餘地が殘されてゐるやうにも考へられる。

なほ『福澤諭吉傳』はその後に

爾來谷元道之等鹿兒島人六七名を始とし諸藩より入塾者がおひ〳〵殖えて來た。(註17)

とのべてゐる。これを入門帳についてみると薩摩藩出身者が元治元年七月十八日に二名、同年十一月十九日四名入塾してゐる所より、元治元年十一月頃の入塾情況を示してゐるものゝごとくである。このときまでに入塾した薩摩藩出身者は、七月十八日入塾の谷村孫七、谷元兵右衛門（道之）、十一月十九日入塾の有馬新太郎、肥後隆之助、木場十藏、堀萬十郎の計六名である。所が谷元兵右衛門（道之）については『元帥公爵大山巖』に依ると、

元師は京都の滯在四十餘日にして、十一月十六日江戸に向つて出發することゝなつた。それは江川太郎左衛門庵坦の塾に入つて、西洋砲術を練習する爲であるが、同行の留學生は、山田孫一郎、竹內健藏、伊東次右衛門、木藤市介、林正之進、坂元彦右衛門、谷元兵右衛門、深見休藏、黑田了介と、元帥を合せて總て十人。是日椎原小彌太等の多數の見送を受けて藩邸を出で、高瀨船にて伏見に下り、伏見よりは三十石船にて淀川を下つて大阪へ、大阪よりは海路を取つて江戸に到り、元帥と山田、竹內、谷元、黑田、木藤、林の七人は、十二月三日を以て江川塾に入門し、八日入塾し、坂元、伊東の二人は、翌元治元年正月二日を以て入塾した。(註18)

とあり、福澤塾入塾前すでに文久三年末江川塾に入塾してゐるのであるが、更に元治元年七月二十三日の長州征討の命が下つたときの京都の様子を、同書は

此時に當り、京都滯在の薩藩家老小松帶力は、書を江戸の藩士に馳せて、大山元帥等二十餘人を京都に招き、禁闕護衛の任に當らしめたので、元帥を始め伊東次右衛門、黑田了介、谷元兵右衛門、山田孫一郎、林正之進、木藤市介、竹内健藏、深見休藏の江川塾生九人、並に谷村孫七、大脇彌兵衛、江夏清一郎、倉野直右衛門、國分次郎兵衛、田中正彦、左近允嘉右衛門、新納善之助、田原嘉八郎、加納雄左衛門、花田勇四郎、北鄕主人、主人の家來有島武二の十三人が京都に向つた。時恰も元帥は、八月朔日を以て砲術の免許皆傳を得、同日江川塾を退いたのであるから、其の京都到著は同月十日前後であらうと思はれる。(註19)

と記して、谷元道之を江川塾生として記してゐる。これは文久三年末より江川塾に入り、福澤塾に入塾して間もなく京都より招命が來た爲に福澤塾在塾と考へなかつたか、或はやゝ距離的には困難が伴ふが兩方に入塾してゐたと思はれるが、いづれにしても谷村孫七も同じく八月に京都に出たのであるから、十一月頃には在塾してゐなかつたのではなからうかと思はれる。

文久三年元治元年の入門生數をみるに、毎月入門生をみることなく、其數も文久三年五藩一〇名、元治元年には前年に入塾をみなかつた八藩(註20)を加え三六名となり。兩年合して中津藩九名、熊本藩一二名、薩摩藩六名、松江藩二名、尼崎藩二名、その他各藩一名となつてゐるのみならず、長崎より元治元年九月十一日に中村一郎、鬼塚辰之助、陽其二、翌月二十五日に加藤雄次郎の計四名が入門してゐる。九州出身者が延岡藩の一名を加え三二名の多きを數へ、入塾生全數

の七割が九州で占められてゐることは、當時の福澤塾が九州地方の鄕土色濃い私塾で、なほ全國的な塾とはなつてゐなかつたことを示すものゝ如くに考へられる。

慶應一、二年頃の塾生に關する記載は少く僅に『慶應義塾七十五年史』に

慶應二年の冬頃紀州から一時に多數の學生が入塾することになり從來の塾舍が狹隘でこれを收容しきれなかつたので、紀州藩では奥平藩邸内に別に一棟の塾舍を建築し同藩の學生を此處に寄宿せしめることになり、邸内では俗にこれを紀州塾と稱してゐたが、必ずしも紀州の學生のみに限つたわけではなく、空席があれば他藩の學生をも收容したのである。(註21)

と述べてゐる。和歌山藩の入塾生は元治元年九月入塾の臼杵鐵太郎を最初とし、慶應元年三名、慶應二年十一月二十八日には、廣井智吉、小川駒橘、和田義郎、小川恒太郎、辻村得一、畑上德太郎、小泉信吉、草鄕清四郎の八名が入塾し、更に日は明らかでないが、同月に松山棟菴、西山乾の兩名が入塾してゐる。更に慶應三年には一月一名、二月五名、三月一名、四月三名、五月一名、十月一名と計一二名の入塾生がある。年度別に見れば、慶應三年が多いが「一時に多數の學生」の入塾をみたときといへば、八名の入塾生を見た慶應二年の十一月二十八日とみなければならない。

ところで福澤塾が新規に八名程度の學生を入塾せしめるのに困難を感ずる程多くの在塾生が存在したであらうか。前述したごとく、元治元年の終頃は約四、五〇名の在塾生があつたとして、その後の入塾生數は第五・六圖に示す如くであり、このうち十一月は和歌山藩の入塾生を除けば、九名となり、五三名の入塾生を數へることが出來る。後に新錢座に移轉した時は一應百名の寄宿生を收容する塾舍として内外に誇つたのであるから、鐵砲洲の在塾生は百名以下ではな

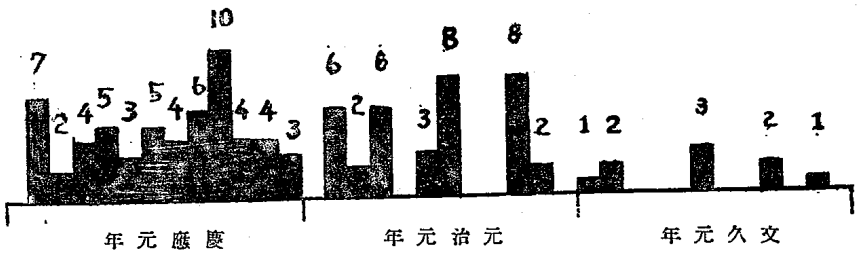
かつたかと考へられるのであるが、相當の退塾生を予測したとしても、一〇名の和歌山藩士の收容を困難としたことはおそらく事實であつたらうと思はれる。亦紀州塾の建設によつて前述したごとく、紀州藩士出身者が慶應三年に一二名の入塾をみるに至つたのではなからうか。

何故に和歌山藩より多數の人員が入塾するに至つたかは、入塾生自身は特に明らかにしてゐないが、南紀德川史は、

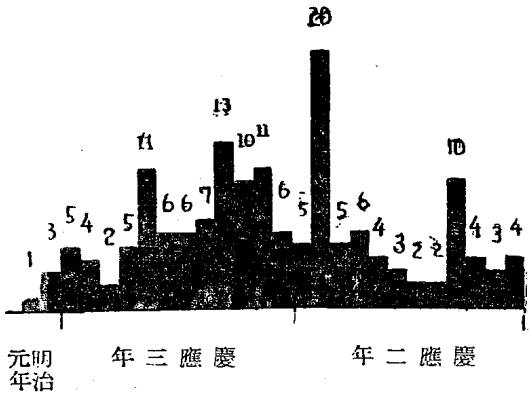
……時勢は益切迫洋學之必要益急を感する場合なれは蘭學生之內津田海介臼杵欽太郎臼杵隆吉等に他家入學を命し或は侍臣中より西山乾を派し洋學に就かしめられ又福澤諭吉は專ら英學を主唱盛に教授を行ふといふより若山より子弟之者數十人を撰み東下せしめ福澤に官費入學を命せられしか慶應義塾を芝新錢座に開設する頃恰も戊辰瓦解の前に際し舉て退學歸國獨り小泉信吉等（和田與四郎・草鄕清四郎・吉川泰次郎）の數人のみ斷然止て苦學勉勵遂に成業に至れり。（註32）

とのべ、慶應二年十一月の入塾生が藩費入塾生であること、元治元年九月入塾の臼杵欽太郎、慶應元年十月八日入塾の臼杵隆吉の兩名も藩命にて入塾したことを明らかにしてゐる。

臼杵欽太郎同隆吉の兩人が何故福澤塾に入つたか明らかでないが、慶應二年冬の多數の入塾生をみたことは、慶應義



第五圖　鐵砲洲時代入門生數月別表上



第六圖　鐵砲洲時代入門生數月別表下

塾が英學塾として既に相當有名であつたため派遣されたのではないだらうか。しかし南紀德川史記載の慶應二年冬以前の洋學研究派遣生四名のうち三名までが福澤塾に入塾してゐることは、有名英學塾としてのもの以上の關係の存在を豫測せしめるのである。

『福澤先生を語る諸名士の直話』所收の草鄕、鎌田兩氏の談話に依ると、福澤は和歌山藩政改革に力のあつた津田出、或は田中善藏、濱口梧陵等と早くより交渉があり、緒方塾の同窓山口良藏も和歌山藩の御抱となつてゐるなどその關係は相當深く、慶應二、三年頃及明治二、三年頃には福澤を紀州に召抱へようとの議があつたといはれてゐる。こうした關係が洋學生を福澤塾に多く派遣することゝなつたものと考へられるのである。

前述の『慶應義塾七十五年史』に「紀州藩では奥平藩邸内に別に一棟の塾舍を建築し」とあり、和歌山藩が問題の塾舍を建てたごとくに考へられるのであるが、これを示す明確な資料はみてゐない。假に和歌山藩が出資したとしても、他藩邸内に建てる事はありえないから、おそらく福澤に金を與へ、福澤は個人として中津藩と交渉の上二階建塾舍一棟を增築したのであらう。

福澤塾と中津藩の關係は、中津藩史料が既に散逸して居る今日明らかにすることは困難であるが、安政五年福澤が大坂より出府して開塾したとき、福澤の私塾として認められてゐたか、中津藩洋學校の一教師としての待遇であつたかは全く判定する事が出來ない。しかし足立寛の如き他藩の者が入塾して居り、さらに、新錢座の一少借家を借りてゐる如きは、福澤の私塾と認められてゐたことを示すものではなからうか。私塾であれば福澤が紀州藩の出資に基いて、藩の許可を得て二階建の塾舍を增築することも充分あり得ることである。

慶應三年の在塾生數に關する記述は『福澤諭吉傳』に

先生の歸朝以來原書を自由に使ふことゝなり、教授上にも多大の便宜を得て、同時に學生の數も大に增加し遂に百人に垂んとする數に至り。(註23)

とあり、又明治一六年の「慶應義塾紀事」には

慶應三年の頃には八十名より百名の數あり。

とあり、さらに『慶應義塾五十年史』にも

慶應三年頃には八十名より百名の多きに達せしが云々。(註24)

と記し、いづれも大同小異である。これらの記事が慶應三年何月頃の在塾生を示すのか不明であるが、福澤は慶應三年六月二十七日に米國より歸朝してゐるから、福澤諭吉傳の記載はその後を示すものであらう。福澤が米國より持歸つた原書は、小野友五郎との爭のため差押へられ、福澤自身も謹慎を命ぜられ、十月にようやく謹慎が解かれてゐるから、荷物が福澤の手に戻り、原書を自由に使用し得るやうになつたのは、早くても十月以後とみなければならない。

慶應三年の入塾生情況は第六圖の如き情況で九二名の入塾をみてゐるが、後半減少を見せてゐる。入門生の傾向から見れば、四月或は八月頃に在塾生が最高に達したのではないかと思はれるのであるが、「慶應義塾紀事」及び『慶應義塾五十年史』は時期をこの年とするのみであるが、『福澤諭吉傳』の如く、福澤の持歸れる原書を自由に讀むやうになつてから增加したとすれば、入塾生の傾向と矛盾するのみならず、『慶應義塾七十五年史』に慶應三年末の情況を、

當時の塾生は大抵諸藩の士族であつて、自から時局に關係のある身分であつたため、多くは歸國して、百名に垂ん

とした塾生が、慶應三年の末から四年の春にかけて四十名に減じ、三十名に減じ、其減少の極は兩三日の間僅々十八名を數ふるに過ぎなくなつたこともあるが……。(註25)

と述べてゐることゝも矛盾が生ずる。しかし前記『福澤諭吉傳』の記載を慶應四年のことゝするならば、百名に至りとする語句にまた矛盾を生ずる。福澤諭吉傳の記載の矛盾は別として、「慶應義塾紀事」、『慶應義塾五十年史』、『慶應義塾七十五年史』に記載されてゐる百名に近い在塾生を八月頃以前とすれば、その前年末は在塾生がさして多くはなかつたものと思はれる。また慶應三年末より慶應四年初頭にかけては、『慶應義塾七十五年史』に述べられてゐる如き在塾生の減少をみたと思はれるのは、慶應三年九月より減少傾向をみせて來た入塾生が、慶應四年二月には一名にまでなつてゐることからも推察することが出來るのである。

慶應一―三年における入塾生の傾向を地方別にみると、九州が元、二年共首位を占めてゐるが、三年には近畿地方が首位を占め、九州は二位となつてゐる。東北地方は元年には九州の一四名に對し一〇名を占めて二位、慶應二年には一三名で三位を占め、其後も大體一〇名以上の入門生をみせてゐることは注意すべき傾向である。

慶應の三年間の傾向をそれ以前の二年の傾向と對比して、最も著しい傾向は入塾生の所屬藩の分布が全國的になり、九州以外の地方の入塾生が相當多くなつて來たといふことで、これは全國的に英學研究の必要が認識されたことにもよるのは勿論乍ら、同時に福澤塾が全國的な塾となりつゝあることを示すものであらうと考へられるのである。

五

前述せる如く新錢座への移轉は慶應四年二、三月の頃で、新錢座へ移轉して程無く慶應義塾の命名を行つたものであらうが、この移轉前後の學生數について「慶應義塾紀事」は

四十名に減じ、三十名に減じ、其減少の極は兩三日の間僅々十八名を數ふるに過ぎなくなつたこともある。

と『慶應義塾七十五年史』と同樣の事をのべてゐる。この學生數の減少せる理由は、維新の政情の不安に基くものであらうが、その最も減少した時期については不明である。入塾生傾向も慶應三年後半より減少をみせ、慶應四年に入ると、二名も多く記されて居る鐵砲州入門帳によつても、一月三名、二月一名、新錢座入門帳上に依れば、一月二名、二月〇となり、慶應四年前半期は慶應三年後半期より低調を示してゐる。かゝる傾向からすれば、最低の在塾生數を示した時期は、百名の寄宿生を收容し得る新錢座塾への移轉を眼前に控えた鐵砲州時代の終末、慶應四年二月頃ではなかつたかと考へられるが、積極的證據がない今日、一應假說として提出し得るに止まる。

福澤が每度塾生に語り亦自からも語つた上野戰爭當日のウエーランドの經濟書講議の話は有名であるが、この上野戰爭當日の在塾生について『三田評論』大正六年七月號所收の森春吉の懷舊談に依ると、上野戰爭の當日、森は米國史の會讀を終り、二三の友人と食事に出掛け、上野の戰爭開始のため避難民が逃れるのを見て、愛宕山に登つて戰況をみようとし、途中同行の丹後宮津の中村某が突然砲聲が聞えたのに驚き腰を拔かしたことがあつたとのべてゐる。この談話から森自身と中村某の在塾してゐた事は知り得る。森は慶應三年一月四日入塾で、森と同行した丹後宮津出身の中村某は、慶應三年五月八日入塾の中村田吉か、同年六月十九日入塾の中村清純のいづれかであらう。

上野戰爭のあつた慶應四年五月十五日は、三正總覽に依れば西曆の七月四日にあたる。この年の西曆一月廿五日が土

曜日でしかも閏年であるから、七月四日は土曜日である。慶應四年四月の「芝新錢座慶應義塾之記」の日課表によると、火木土曜日十時からが福澤のエーランド經濟書の講義時間である。小幡は月水金の三日間十時よりクアッケンボスの合衆國歴史の講議をしてゐるが、森の云ふ會讀は日課表には出てゐないが、或はこの日行はれたのであらうか。

根據は極めて薄いものではあるが、「芝新錢座慶應義塾之記」の日課表に記載されてゐる講議擔當者は或は五月十五日に在塾したのではないかとも考へられる。從がつて、福澤を筆頭に、小幡篤次郎、村上辰次郎、小幡甚三郎、永島貞次郎、松山棟庵、小泉信吉が在塾したのではあるまいか、また慶應四年四月？十日附山口良藏宛福澤書翰に、

尊藩の人にて在塾の面々は當時松山小泉草鄉辻村小川吉田の六名なり(註26)

と和歌山藩出身者の在塾者を報じてゐる。この書翰は文中に四月云々の語がある所より、五月の書翰であらうと云はれてゐる。五月十日以前の和歌山藩入塾者は、入門帳によれば慶應三年十月二十三日入塾の鈴村主膳を最后に二六名の多きに達してゐるが、此處に記された六名がなほ在塾してゐたことを知ることが出來る。書翰中の人物は、慶應二年十一月入塾の松山棟庵、同年十一月二十八日入塾の小泉信吉、草鄉清四郎、辻村得一、小川駒橘、慶應三年四月十日入塾の吉田政之亟の六名で、いづれも既に相當の期間を經過してゐる。したがつてこの書翰の五日後の上野戰爭の當日に在塾してゐたとみることが出來るやうに思はれる。又南紀德川史に、

慶應義塾を芝新錢座に開設する頃恰も戊辰瓦解の前に際し擧て退學歸國獨り小泉信吉等和田與四郎草鄉清四郎吉川泰次郎の數人のみ斷然止て苦學勉勵遂に成業に至れり(註27)

とあり、和田義郎吉川泰次郎もこの時に在塾してゐたと推定出來るやうに思はれる。

福澤諭吉傳所收の三輪光五郎の談話に、(註28)三輪は新錢座に於て、福澤が米國より持歸つて、一時小野友五郎との衝突から差押へられてゐた原書の荷物を學生と共に解いたと述べてゐるところより、おそらく三輪も當日在塾してゐたのではあるまいか、『三田評論』大正五年八月號所收の後藤牧太の懷舊談によると、後藤は入塾最初に永島貞次郎よりクワッケンボスの窮理書を敎はつたと述べてゐる。前記日課表によれば、永島は水土の二日間の講議である。後藤の入門は慶應四年五月十四日であるから、入塾手續を終つた翌日より受講すれば、十五日土曜より講議を受ける事が可能なわけである。したがつて後藤牧太も十五日に在塾してゐたのではあるまいか。また前述の森春吉の懷舊談に依ると、肥田玄次郎も亦ウエーランドの講議を聽いたと述べており、鎌田榮吉も肥田より上野戰爭當日の樣子を聞いたと語つてゐる。彼の入門が慶應四年四月一日であるから、五月十五日には在塾してゐたやうに考へられる。

以上述べたところにより、慶應四年五月十五日に在塾してゐたと思はれる人數は一七名を數へうるのであるが、今慶喜が大政奉還の擧に出で、幕末の政局が急迫して來た慶應三年十月より、慶應四年五月十四日迄の入塾生の數をみるに合計二十七名に達し、五月十五日には蜂須賀鎌吉が入塾してゐる。これらの入塾生中當日在塾したと推定されるのは、肥田、後藤の兩名であるが、相當混亂した世情にもかゝはらず、入塾してゐるのであるから、勿論中には福翁自傳に述べられてゐる如く、在塾とは名ばかりで、一種の宿舍代りにしてゐたものも存したらうが、後述もする如く猶數名の在塾生があつたと考へられるやうに思へるのである。

慶應四年六月七日附山口良藏宛の福澤書翰には、

既に江戸市中にて英書を讀候人物も澤山有之筈の處此節何所へ如何相成候哉讀書の沙汰は絶てなし都下に讀書の場

所は唯弊塾一處に御座候これも昨年に比すれば生徒の數三分の二を減ぜり（註29）

とある。入門帳によれば、前記五月十五日後六月七日以前の入塾生は、六月三日入塾の堀江四方之介、六月五日入塾の名島藏太の二名にすぎないが、福翁自傳によると、ようやく世情の落着を取戻すと次第に歸塾する者もあつたと述べてゐる點と、慶應二年に在塾生數一〇〇名に達したとある點とを併せ考へるとき、大體三〇名前後の在塾生が六月頃に存したとみて大過ないやうに考へられる。

『福澤諭吉傳』によると、上野の戰爭が終り東北地方がなほ戰亂中であるにも拘らず、續々入塾者があり、いよ〳〵戰亂の收まるにしたがひ入塾するもの激增し、明治元年には既に一〇〇餘名の新入者ありと入塾生數について記してゐる。（註20）明治元年の入塾者は第七圖の如く九十五名に達してゐる。福澤諭吉傳の文意は或ひは上野戰爭後の如くにも考へられるのであるが、五月十六日以降の入塾生は七六名に達してゐて、前述の如く復學者も相當存したとすればこれまた一〇〇名近くになることもあり得るので、そのいづれを指すかは明らかでない。

明治二年に入ると、福澤諭吉傳によれば、學生の增加激しく、これを收容しきれないので、二階建の校舍一棟を增築したと云ふ。この校舍建設については、「全集緒言」に於いて福澤自から、

洋兵明鑑は單に一部の兵書なれども、其飜譯に就ては大に事情の存するものあり。慶應義塾は元より江戸鐵砲州奥平藩邸に在り。鐵砲州を去て芝新錢座に移りしは慶應四年の春、明治改元の前なりしが、時は恰も維新の兵亂最中にして新錢座新塾の經營も唯僅に成るのみ。然るに入學生の來るは日に多數にして迎も之を容るゝに足らず、是非とも一棟の塾舍を新築すること必要なれども所謂先きだつものは金にして、以前の經營に有金は既に使ひ盡し、間

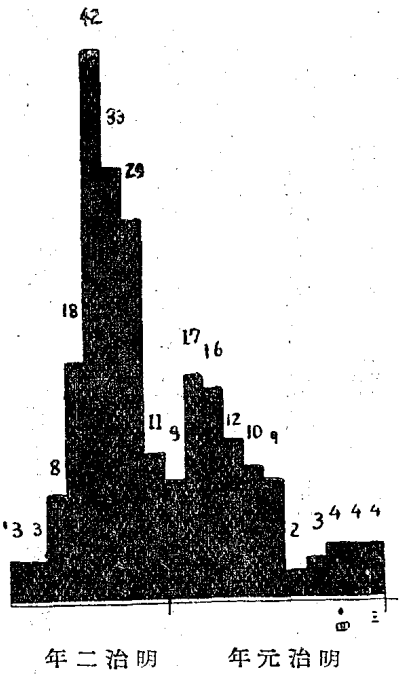
もなく更らに新築とは實に當惑の次第にして、夫れ是れと思案の折柄、熊本藩中に知る人ありて、其士人の平生兵事を好み、或日私宅に來訪、何か新舶來に面白き兵書はなきやとの話に應じ、偶然余が手許に持合せの原書を示し、是れは云々の書なり上木出來の上は熊本藩にて何百部を引取ることに約して相別れ、事急なれば一人の手にては間に合はず、乃ち小幡篤次郎、其實弟仁三郎の兩氏と余と三名にて同時に匆々着手し、匆々版行したるは洋兵明鑑五冊にして、約束の如く其何百部を熊本藩に納めて請取りたる金高六百圓ばかり、恰も天與の資金にして直に塾舍の新築に取掛り、當時物價も今と違ひ下直なることなれば、凡そ六百圓の金を以て二階立の一棟を立派に建築し、疊建具も入れて大に學生の便利を成したり。（註31）

とその事情を述べてゐる。この福澤の文意からは、洋兵明鑑を至急飜譯版行し、約束の部數を熊本藩に納めて六〇〇圓の金を請取り、それにより二階建の塾舍を建築した如くである。洋兵明鑑は明治二年初春刊行になつてゐるが、熊本藩に納入し代金を請取つた月日は不明であるが、恐らく學生增加のためこれを收容し切れぬ事情であつたため、おそくとも版行完成と同時に早速納入し代金を請取つたのではあるまいか。肥後藩國事資料には洋兵明鑑に關する記事はないが、その影響の大であつたことは『肥後文敎史』に明治初年の情況を報じて

熊本の思想界は、渾沌の裡に自然の成行きを待つもの丶やうであつた、時に決河奔馬の勢を以て、龍ひ來たのは西洋文明である、我が熊本の最も誇とする武略武道までも惜げもなく西洋式に改めて、赤い洋服を着け、とろつく太鼓にうかされて洋兵明鑑（福澤諭吉等共譯）的なる英式操練を始めたといふ位だから、各黨の學風が皆西洋主義に染められたことは當然の成行きであつて、云々（註32）

と洋兵明鑑が熊本藩兵制改革に影響を與へた事を述べてゐる。

熊本藩より代金を受取つた福澤が、それより直に塾舍の建築にかゝつたとすると、一月に着工されたことになるのであるが、建物の大さにもよるが、一ケ月以内にこれを完成する事はやゝ困難であるやうに思はれる。熊本藩より洋兵明鑑の代金として清取つた代金で建築した塾舍は、南西奥の二階建の塾舍であらうと思はれる。「芝新錢座慶應義塾之記」の附圖に、南側最奥に波線で圍ひ未成と記した部分があるが、これは、明治二年八月の「慶應義塾之記」附圖には二階建の塾舍となつてゐる「芝新錢座慶應義塾之記」の未成部分はおそらく前述もした如く建築豫定になつてゐて未完成のために波線で表はしたものではなからうか、したがつて明治二年八月の「慶應義塾之記」附圖の南西の二階建塾舍が熊本藩より請取つた代金にて建築したものであらう。



第七圖　新錢座時代入門生數月別表上

入門帳記載の入塾生數の傾向は、明治元年七月以來增加の傾向をみせてゐたのが、十二月、一月と減少し、二、三、四月と著しく增加をみせてゐるのである。こうした入塾生の傾向が單純な理由に依るものでないことは勿論であるが、明治二年二—四月の傾向は、新築塾舍の完成によるものとは考へられないであらうか。

尤も明治二年四月四日附山口良藏宛福澤書翰に、

弊塾も人數のみ次第に增加此節内塾生百人餘塾舍も既に充滿いたし三月廿日頃より入塾御斷申候(註33)

とあり、新錢座の塾舍が一〇〇人の寄宿生を收容する塾舍として建築したと云はれるから、二階建の塾舍はこのとき未だ建築されてゐなかつたとも解釋出來るのである。然し假に明治二年四月四日に猶洋兵明鑑の收入に依り二階建の塾舍が建築されてゐないとすると「慶應義塾之記」附圖には明らかに二階建塾舍が增築されてゐるから、この塾舍の建築は明治二年四月四日以降八月迄の間に建築されたと見なければならぬ。福澤は前記書翰に於て三月二十日頃より入塾を斷つて居ると云ひ乍ら、實際の入塾生數は入門帳に依れば、四月四四名の入塾生を見せ、五、六、七月と次第に入塾生が減少し、八月に再び增加してゐる。故に塾舍の增築に伴ふ收容力の增大の結果としての入塾生增加と云ふ點から云ふならば塾舍の增築は四月か八月としなければならない。然し四月とすると、四月四日の山口宛の書翰と矛盾する如く考へられるからこれは八月と見なければならない。然るに八月には汐留の奥平邸內の長屋を借用して此處に汐留出張所が開設されてゐるのである。

二階建の塾舍を建て、更に出張所迄設けることをしたとすることは、いさゝか無理があるやうに考へられるのである。また前記山口宛の書翰は引續いて

これまで小生の身分不相應の金を費し塾舍も建營いたし候義に御座候へ共有限の微力最早金もなくなり此後は塾を建候事も出來不申殘念に御座候（註33）

と悲歎してゐる。この書翰は全く洋兵明鑑飜譯に依る收入の事に觸れて居ない。更に洋兵明鑑は一月に出版されてゐるのであり、近況を書送つてゐる親友山口への書翰として餘りにもよそ〳〵しい感じがする。また福澤が洋兵明鑑の飜譯を急いだことは、おそらく塾舍建築を急ぐ必要も存したためと思はれるから、一月に出版した本の代金を四月に至るも

請取らないとする事はあり得ないやうに考へられる。したがつて、山口宛の書翰で福澤の歎じて居るのは、洋兵明鑑の代金を以て建築した塾舍が、――入塾生數の變化から推しておそらく二月初旬には使用されはじめたのではないかと思はれるのであるが――直に滿員に近い入塾生をみたことから、この激しい入塾生の增加傾向に應ずべく增築するだけの經濟的力の無い事を述べた文面と解すべきではないだらうか。積極的にその建築時期を示す資料をみない今日、一應假設として提出するのみではあるが、洋兵明鑑の收入により增築された時期は、入塾生增加の傾向をも併せ考へて、やはり明治二年二月前後ではなからうか。

六

明治二年二月前後に二階建の塾舍を增築した福澤が、またゝくうちに增加する入塾生の情況に應ずる經濟的餘裕なしと歎息してゐるのであるが、また前記明治二年八月の「慶應義塾之記附圖」をみても、新錢座の敷地にはもはやこれ以上塾舍を建てる餘地は無さそうである。かゝる情況に於て、福澤が實施し得る塾生の收容力の擴大策としては、塾舍に使用し得る建物を新錢座より程遠からぬ地に於て借用することであらう。かくてこゝに汐留の中津藩邸の長屋を借用して汐留出張所が設置されるに至つたのであらう。

汐留出張所については、明治二年八月の「慶應義塾新議」に、その設置事情を簡單に說明してゐる。

去年の春我慶應義塾を開きしに、有志の輩四方より集り、數月を出でずして、塾舍百餘人の定員既に滿て、今年初夏の頃よりは、通ひに來學せんとする人までも、講堂の狹きゆへを以て斷り居れり、由て此度は又社中申合せ、汐

留奥平侯の屋鋪中に明たる長屋を借用し、假りに義塾出張の講堂となし、生徒の人員を限らず、教授の行屆くだけ、勉て初學の人を導かんとするに決せり。

とある。又同月の「慶應義塾之記」にも汐留出張所の日課表を載せてゐる點より、汐留出張所が明治二年八月に開設されたものと考へられると共に、前述の八月以前の三ヶ月間の入塾生數の減少傾向は、講堂の狹さに主たる理由が存するやうに思へる。

「慶應義塾新議」によると、汐留出張所の出來る以前には、內塾生外塾生共に收容能力の限界に達してゐたものゝやうで、其の數は不明である。出張所の收容人員についても、正確なところは明らかでないが、明治二年九月三日に出張所に入塾した須田辰次郎の懷舊談によると、四、五〇名の在塾生がゐたといふ。また『慶應義塾七十五年史』には、後述の如く汐留の出張所が燒けて古川端の龍源寺に移つたのは、出張所の一部約五十名であつたと云つてゐる點より、須田の云ふ四、五〇名より若干多い學生を收容し得たのではないかと思はれる。『福澤諭吉傳』によると明治二年の新入生は二五〇名に達したといひ、入門帳によると二五四名の入塾生を數へ、分塾の出來た八月以降の入塾生數は六三名に達してゐる。この六三名の入塾生が加はつても、他方或程度は退塾生も存することゝ思はれる點からも、五〇名を若干上廻る塾生が收容されたのではないかと思はれるのである。(註34)

この出張所も同年十二月二十八日尾張町より出火し、中津藩邸も燒失の危險にさらされ、出張所生及び本塾生が懸命に消化に努め、中津藩本邸は燒失したが、出張所の長屋は燒失をまぬがれた。しかし中津藩より返還要求があり、交渉の結果階下を藩側で使用することゝなつた。「福澤諭吉傳」によるとその後間もなく汐留の中津藩邸が民部省の用地と

して政府に召上られることになつたので、奥平家に縁故のある麻布古川端の龍源寺を借り、これを分塾とし、汐留の分塾生の多くを此處に移したといはれてゐる。明治三年五月七日附の藤野善藏宛福澤書翰に、

土井さんの屋敷普請の積り取掛らんとせし處不取敢五百兩斗りの入費出來上りの處にて人數百人斗りの寄宿出來の義且又普請の都合も彼屋敷役人に權なく模樣替も十分に出來不申旁以先づ見合せ三田龍源寺と申す奥平樣の寺を借用し汐留の人數其外五十人餘引移り御奉行樣は永貞小杉和田荘田四名引越申候奥平の替屋敷此度山下御門内阿部の屋敷を貰ひ地坪七千坪長屋澤山に付又候奥平に借用を談判いたし居候喧嘩をしたり熟談をしたりおかしく御座候得共互にしんから立腹も不致役人も頻に心配したし居候此談判出來次第龍源寺は引拂候積りに御座候(註35)

とあり、龍源寺に引移る以前に土井家と交渉してゐることを知り得るのである。福澤が奥平藩邸が政府に召上げられるまで、長屋の階上だけの使用に甘んじてゐたか否かは不明である。

明治二年十一月五日附の藤本箭山宛福澤書翰に、

塾も狹く御兩人共一時に這入候義六ケ敷候(註36)

と塾の餘祐の無い事を報告してゐること及び、當時の入門生數から推察して、新錢座の本塾も收容能力の限界に近かつたことゝ思はれるから、汐留出張所が階上だけに限られたことは、收容人員の點に於ても相當の困難が生じたはずである。それがため福澤が汐留出張所に代る他の塾舍を探したらうことが豫想されるのである。かくて藤野宛の書翰に報じてゐるごとく、土井家との交渉が行はれ、これが妥結せず、龍源寺を分塾としたのであらうが、藤野宛書翰にもあるごとく、福澤はこゝに滿足せず、龍源寺を一時的のものと考へてゐたやうで、したがつて、或は山下御門内の阿部家の屋

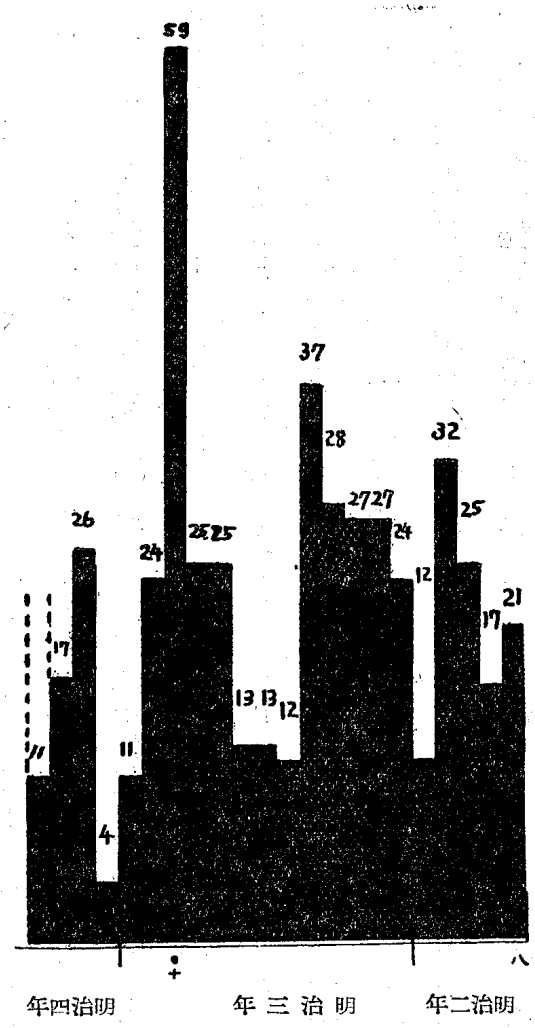
敷を貰つた奥平家に再び長屋の借用方を交渉したのであらう。

龍源寺分塾に移つたのが何時であるかは不明であるが、十二月に中津藩邸が燒失し、出張所返換問題があり、土井家との交渉が間に存したことを考へて、明治三年に入つてからではなかつたかと思はれる。

この龍源寺分塾と前後して芝增上寺山内の廣度院にも分塾がおかれ、稻垣銀治及渡邊久馬八が監督に就任してゐた。この廣度院分塾の設立月日も明らかでないが、大正七年十月の『三田評論』所收の懷舊談によると、三〇餘名の在塾生が居り、塾生の過半は尾張、加賀、土佐、長州、長岡の諸藩士であつたとのことである。勿論こゝに述られた諸藩士は新入塾生のみと限らず、且亦新入塾生全部とは限らないが、一應明治三年一月以降これら分塾が廢され江川長屋の出來た事の明らかな閏十月以前の前記諸藩の入塾生情況をみるに、尾張藩は明治二年一名、三年一、四、五、六、八月各一名十月二名の計七名、加賀藩は明治二年迄に一一名の入塾生があるが、三年は一月二名、三月四名、七、九月各一名計九名、土佐藩は二年迄に二九名の入塾生があるが、三年は三月に二名の入塾生をみたのみである。長州藩は三年に始めて入塾生をみたのであるが、一月二名、三、七、九月各一名計五名、長岡藩は明治二年迄に一三名の入塾をみてゐるが、三年には二、三、五、六、八月に各一名計五名の入塾生をみてゐて、これら五藩の入塾生は二八名を數える。明治三年一—十月間の入塾生總數は二三八名にのぼつてゐることから考へて、比較的前記諸藩士が集つてゐたといふことは云ひ得るやうである。

福澤は塾生の急增傾向に已むなく分塾を設立したのであらうが、これらの分塾は新錢座の本塾より相當の距離にあつたために、かなりの不便が存したであらうことは容易に想像出來るところである。此處において、福澤が新錢座の本塾

に近い場所に塾舎の候補建築物を物色することは當然豫想される。その結果として、江川塾の長屋を入手して、分塾を廢し寄宿生全部と本塾生の幾分とをこゝに收容したのであらうと考へられるのである。この江川長屋開設の時期を明らかにする資料もこれまたみてゐないのであるが、牧野鋭橘が慶應義塾に入塾したとき、江川長屋に入つたといふから、彼の入塾した明治二年閏十月六日以前に既に、江川長屋が開設されてゐたと云ふことは推定し得るのである。



第八圖　新錢座時代入門生數月別表下

ところで、明治三年の入塾生の情況をみるに、六、七、八月に入塾生がやゝ低調をみせ、九、十、閏十月と相當數の入塾生をみてゐるのである。この六、七、八の三ヶ月間の入塾生數の低調の原因については、別段これを明らかにするやうな資料をみてゐないで、かへつてその前月即ち明治三年の五月七日に、福澤が藤野に送つた書翰に、

御出立後も御客樣は不相變澤山參り今日までは斷りも不致

とその頃まで希望に應じて入塾を許してゐた事を知り得るところから、逆に考へて、特別の理由がないのに入塾生數の低下をみるといふことは、或は內塾生の收容能力が、新錢座の本塾は勿論、龍源寺、廣度院の分塾をも含めて、すべて

限界に達したためと考へることは出來ないであらうか。勿論この推察は極めて根據の薄弱なものではあるけれども、江川長屋の開設されたときに、分塾は勿論、本塾よりも此處に或數の塾生を移したと云はれてゐることからも、前記の推測が許されるのではないかと思はれるのである。

もしこの推測が許されるとするならば、入塾生が再び增加の傾向をみせ始めた九月頃に、江川長屋が開設されたといふことが言へるやうに考へられるのである。この推測を可能ならしめるものとしては、第一資料ではないが、三田評論大正七年十月號所收の慶應義塾懷舊談に、江川長屋の開設を明治三年秋と述べてゐることで、七、八、九の三ケ月間が秋季であるが、この三ケ月間のうちで、最も可能性のつよいのは、九月ではないかと考へるためである。この江川長屋は翌年春、塾が三田に移轉するに及んで、三田に移築されてゐる。

飯田平作の懷舊談によると、彼の入塾した明治三年十二月二十一日頃の在塾生數は三〇〇名程度存したと述べてゐるところから考へて、本塾の收容能力は、最初一〇〇名の寄宿生を收容し得ることを目的に建てられ、やがて洋兵明鑑の收益により二階建の塾舍を增築してゐるから、一五〇名程度であつたのではないかと思はれるのである。したがつて江川長屋の收容能力は外塾生が相當存した事、龍源寺に約五〇名、廣度院に約三〇名の分塾の者を收容して猶幾分餘祐が存した點から考へて、一〇〇名前後の收容能力を持つて居り、其他は相當外塾生がゐたのではないかと考へられるのである。

以上在塾生數を中心に考察して來たのであるが、新錢座に移つた慶應義塾は、移轉初頭は、たま〳〵維新の不安定な世情のために在塾生數も極はめて小數であつたが、世情の安定とともに、洋學研究の必要が痛感されるに及んで、明治

元年秋頃よりは、大體に於てその收容能力以上の入塾希望者があり、度々これら希望者を拒るといふ事態が生じ、收容能力の增大に伴つてまたその在塾生の數も增加していつたものゝ如くに考へられるのである。

明治四年四月の在塾生數については、慶應四年四月の「慶應義塾學業勤怠表」によるのが最も正確ではないかと考へられる。この勤怠表は三一×一一・五糎の横綴の和紙に木版にて印刷したもので、五等以下の塾生の會讀の點及素讀の出席等を記してゐる。その規則は左の如くである。

凡例

一會讀ハ一月六度

一會讀生ハ素讀一科一六ノ日休業一月二十四度

一會讀ノ缺席ハ黑點六ニ當ル

一同聽講ハ黑點四ニ當ル

一同不快ニテ缺席ハ一度ヲ許シ一度以上ハ尋常ノ缺席ニ準ス

一會讀ノ點ニシト記シタルハ一月ノ黑白點ヲ差引シテ白點ヲ殘シタル印

一同〃ト記シタルハ同斷黑點ヲ殘シタル印

一同●ノ印ハ一月黑ノミヲ得タル者

一同○ノ印ハ一月白ノミヲ得タル者

一同〃ハ白點黑點平均ノ印

一同ケ‖ハ缺席ノ印
一同チ‖ハ聽講ノ印
一同フ‖ハ不快ノ印
一素讀生ノ業每日二料ツヽ一六ノ日休業一月ニ科合シテ四十八度
一素讀試業ノ點ニ〇ノ印アルハ業ヲ試テ皆答ル者
一同ク‖ハ黑ヲ得タル印
一同ケ‖ハ缺席ノ印
一會讀生素讀生ノ出席ニ印ナキモノハ缺席セザル者
一同時ニ一組以上ノ文典會讀アルトキハ第一番第二番等ノ號アレトモ組ノ異ナルノミニテ上下ノ別アルニアラズ席順ノ如キハ同組內勝敗ノ點ニ從テ之ヲ定メ他ノ組ニ關ル事ナシ
一未タ等級ニ加ハラズシテ地理書等ノ素讀ニ出席スルモノ並文典素讀ノ人ハ只出席ノ數ヲ記スルノミニシテ席順ノ上下ヲ記スニアラズ

とある。第五等以下の記載塾生の數は、第五等一一名、第六等八名、第七等一二名、第八等二二名、第九等二七名、第十等二八名、第十一等三一名、第十二等一九名、第一番文典會讀一三名、第二番文典會讀一二名、第三番文典會讀一四名、第四番文典會讀一四名、第五番文典會讀一三名、素讀出席等外一一名、素讀出席文典二七名、計二六二名を數へる、なほ第一―四等は教員であるが、これは印刷されていないが、たま〳〵朱筆で記載された勤怠表があるが、それによる

と、

第一等　福澤諭吉、小幡篤次郎

第二等　小幡甚三郎、藤野善藏、濱野定四郎

第三等　村尾眞一、荘田平五郎、海老名晋、小野太十郎、後藤牧太

第四等　和田義郎、小谷忍、吉村寅太郎、石坂專之助、芦野卷、丹文次郎

の十六名が記載されてゐる。これと合せて在塾者は福澤を除外して二七七名となる。そのうち入塾年月の慶應四年五月十五日以前の者を記すると、一等及二等の元治元年六月入塾の小幡篤次郎、同甚三郎、濱野定四郎、第三等に、慶應三年八月一日入塾の海老名晋、同年八月四日入塾の小野太十郎、慶應四年五月十四日入塾の後藤牧太があり、第四には慶應二年十一月二十八日入塾の和田義郎、慶應元年七月一日入塾の小谷忍がある。第五等には慶應三年四月十日入塾の吉田政之亟、第六等には慶應二年十一月入塾の八田定一、第七等には慶應二年三月下旬入塾の武藤吉次郎、慶應三年一月四日入塾の森省尙（森春吉の誤りか）、第八等には慶應三年三月二十五日入塾の佐久間英次郎、第九等には慶應三年五月十七日入塾の有壁精一、第十等には慶應三年一月二十二日入塾の鷲見謹吾、第十一等には慶應元年九月十八日入塾の幸田末吉の一六名を數へ得る。勿論これらの古い入塾者の全部が入塾當初より引續いて在塾してゐたとは斷じ難いのであるが、前に記した上野戰爭當時在塾してゐたことのほゞ確實な小幡兄弟、後藤牧太、和田義郎、吉田政之亟、森春吉以外の一〇名中には上野戰爭當日も在塾してゐた者が居る樣に考へられるのである。所でこの勤怠表は明治四年四月と記されて居るがそのなかには四月下旬に入塾したものも含まれてゐる所より、四月中の勤怠表と考へられる。したがつて

三田移轉直前の在塾生數は二七七名よりやゝ下まはるものと考へられるのである。

また、福澤諭吉傳採錄の明治四年六月發行の新聞雜誌第五號所收の同年三月中の東京府下私塾幷生徒數の表に

英佛學	箕作秋坪	生徒百六名	
洋漢學	山東一郎	同	三十四名
英學	福地源一郎	同	七十八名
洋漢學	尺振八	同	百十一名
英學	田中錄之助	同	二十三名
英佛學	司馬小博士	同	十九名
洋學	伊東昌之助	同	十四名
佛蘭學	中神保	同	十四名
洋學	西周助	同	十三名
英學	上野鋏太郎	同	九名
英學	山尾工部權大丞	同	八名
洋學	高橋琢也	同	四名
佛學	村上英俊	同	十三名
英學	吉田健三	同	六名

英　學　福　澤　諭　吉　同三百三十三名

英　學　鳴　門　二　郎　吉　同　百四十一名

とある如く、二位の鳴門塾以下を斷然引離してゐる盛況は、多少慶應義塾在塾生數を過大に評した點も存するのであるが、大體の傾向を示したものと云へるのではなからうか、またそれと同時に慶應年間にその曙光をみせた入塾生の全國的傾向が、この新錢座時代に至つてより明瞭に示されて來た如くに思はれるのである。

註1　福澤諭吉傳第一卷二二六頁所收足立寛懷旧談

註2　福澤諭吉傳第一卷三〇二頁

註3　福澤諭吉傳第一卷四一八頁

註4　長屋の正確な大さは明らかでないが、福澤の居宅は一番奥の一棟であると云ふから他の四棟分が塾舍として使用されたものと思はれるが其内一部屋は塾頭の部屋であるといふ。福澤諭吉傳第一卷四一九頁にその大さについて、十疊か十二疊のものが二室と他に小さい部屋が五つか六つあつたと述べて居る。同頁所收の塾舍平面圖では食堂を除いて三八疊程の大さがあるやうに見える。この他に塾頭と福澤の住居が別にあつたのではないかと思はれるのは、玄關と思はれるものが、前述の圖面に三つしかないからである。

註5　福澤諭吉傳第一卷四二一頁

註6　慶應義塾七十五年史五頁

註7　福澤諭古傳第一卷五八九—五九四頁

註8　續福澤全集第六卷六一三頁

註9　續福澤全集第六卷四九八頁

註10　慶應義塾五十年史八五—八六頁

註11　傳記「近藤眞琴」
註12　慶應義塾新年發會記（明治十二年一月二十五日）
註13　慶應義塾記事（明治十六年）
註14　第一回米國旅行より歸朝後卽ち萬延元年六月以降
註15　福澤諭吉傳第一卷二六八頁
註16　福澤諭吉傳第一卷四三〇頁
註17　福澤諭吉傳第一卷四三一頁
註18　元帥公爵大山巖一四一―二頁
註19　元帥公爵大山巖一五三頁
註20　元治元年の新規藩の中には後述の四名の入塾をみた長崎は、藩でないからその中に數へなかつた。
註21　慶應義塾七十五年史九頁
註22　南紀德川史第一四卷一二八頁
註23　福澤諭吉傳第一卷四四四頁
註24　慶應義塾五十年史三二頁
註25　慶應義塾七十五年史二二頁
註26　續福澤全集第六卷四四九頁
註27　南紀德川史
註28　福澤諭吉傳第一卷五一一頁
註29　續福澤全集第六卷五〇〇頁
註30　福澤諭吉傳第一卷六三三頁
註31　福澤全集第一卷四一―四二頁

註32　肥後文教史四三三頁
註33　續福澤全集第六卷五〇五頁
註34　汐留出張所設立を知らせる爲に出來た慶應義塾新議には「此度出張の講堂は講書教授の場所のみにて、眠食の部屋なし。」と述べてゐることから、一應內塾生ではないやうにも考へられるが、最初中津藩との交渉は寄宿生を入れない相談であつたが、次第に寄宿生が入るやうになつたのではないかと思はれる點もある。しかし例へば十二月汐留の中津藩邸の火事の際の出張所の消火出動の如き、內宿生とも考へられるが、また近所に宿泊してゐた外塾生とも考へられる。この點は資料が曖昧であるので、一應疑問としておく。
註35　續福澤全集第六卷五九二頁
註36　續福澤全集第六卷六〇四頁

上述の諸藩中和歌山、熊本、高知、仙臺の諸藩は大體每年入門生を出してゐるのである。和歌山藩は紀州塾と呼ばれる塾舍を建てゝ居り、熊本藩は洋兵明鑑を買入れて居り、仙臺藩は江戸留守居役大童信太夫と福澤の交友關係がある點から見て、これら特別關係深い諸藩が、特に慶應義塾に入門生を送る事に熱心であつたとみる事が出來る樣である。

薩摩藩が慶應三年、明治元年の變革期に入門生をみてゐないことは、同藩と關係深い人吉藩と共に、維新の經營に多忙であつた爲ではなからうか。廣島、福井の二藩が明治一二年に入門生が中絕して居るが、其の理由は不明である。

これに對し、明治に入つて始めて入門生をみたのは、久居、吉田、大村、掛川、岩國、福山、大泉、鳥取、名古屋、鳥羽の諸藩で、名古屋鳥取の二藩以外は、比較的小藩が多いのも興味ある傾向の一つである。特に久居藩のごときは、明治三年に一擧に一九名の入門生をみて居る。これは極めて特異な現象であるが、その理由は不明である。

（四〇〇頁に續く）